

問題 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本と西洋との自然観のちがいがよく表れているのが庭である。内と外との中間地点である庭に、どのように自然を取り入れるか。その方法に、両者の自然に対する意識のちがいがうかがえる。

自然を取り入れるといっても、庭に草木をたくさん植えたり、水を流したりして自然らしさを演出しようとするのは、むしろ西洋のほうである。日本はむしろ逆だ。日本でもっとも有名な庭といえば、室町時代むろまちにつくられた京都の竜安寺の石庭を思い出す人は多いだろう。石庭の名のとおり、この庭を構成しているのは石と砂である。いわゆるかれざんすい枯山水とよばれるものだ。枯山水は、石と砂だけで、山のつらなる様や、滝たきや河の流れを表現する。そこでは、植物はかえってじやまであり、極力排除はいじょされる。

それに対して、西洋の庭は花が中心だ。色とりどりの、なるべく珍めずらしい花がたくさん咲いているほど美しい庭とされる。西洋の庭の楽しみは、花を見ることといってもいい。ガーデニングとは、基本的には季節によって木を植え替かえたり、さまざまな花を咲かせたりすることである。

しかし、そうだとすると植物をたくさん植えている西洋の庭の方が、自然を豊かに取り入れているような気もする。だが、そこに西洋と日本の自然観の大きなちがいがある。西洋の庭に植えられている草花は枯かれれば取り替えられる。つまり自然は交換可能こうかん

な物として扱あつかわれている。いいかえれば、そこでは見えているものがすべてである。

それに対して、日本の枯山水は、見る者の想像力によって、目には見えない自然のいとなみと一つになるための人工的な装置だといえる。そこではたんに、砂が海を表していると理解するだけでは足りない。だいじなのは、そこに実際に水がたゆたっているのを積極的に想像し、そのイメージを押し広げていくことである。

枯山水には、「主石しゅせき」と呼ばれる水源となる岩がある。その岩を探しあて、そこから湧わきだす水の流れを思い浮かべ、その水が庭を満たし、渦うずを巻き、奔流ほんりゅうとなって山を打ち寄せ、宇宙をも満たしていく。そんな様子を心の中にと想像しながら、庭を眺め、宇宙の中にいる自分を\*観想かんそうする。それが枯山水の味わい方である。

受動的に理解するのではなく、想像力によってはたらきかけて、そこに大海や宇宙を創造していく。枯山水という名がついてはいるが、それは、けっして枯れることのない水の流れや、無限の時間的広がりを感じるための庭なのである。

だが、どうして石なのか。前に述べたように、日本にはカミが降りてくる大石を\*磐座いわくらとして信仰しんこうしてきた伝統がある。石はカミの住まいであり、宇宙の縮図しゆくずである。そのことを思い、大自然に包まれているような心持ちで、石に向き合うことが日本の庭の味わい方なのである。

このように石や砂を、山や島、川や海のイメージでとらえることを「見立て」という。目の前にある前景の背後に、後景を透すか

して見る。この「見立て」は、日本人が長年かけて練り上げてきた、美しさを深く味わうための文化の\*エッセンスといってよい。盆栽も、小さな鉢植えの木を樹齢数千年の老木に見立てて味わうものである。茶室も、あの狭い空間を仙人の住む高峰の頂などに見立てるものだ。茶道で、一杯の茶の中に宇宙があるというのも「見立て」であるし、茶道具ではないひょうたんを花入れに使ってみるといふ遊び心も「見立て」である。落語も、特別な道具を使わず、一本の扇子を簪に見立ててそばをすすってみせたり、煙管に見立てたりしてさまざまな場面を表わす「見立て」の芸である。

見立ては、もともとは漢詩や和歌など文芸の世界で用いられていた\*修辭法の一つだ。たとえば、古今和歌集のつぎの一首などもそうである。

冬ながら空より花のちりくるは 雲のあなたは春にやあるらむ

ここで冬の空から散ってくる花とは、もちろん雪なのだが、それを花に見立てて、雲の向こうは、もう春なのだなど想像しているのである。

見立ては、目の前にある有限なもの奥に、より大きなものや、無限なものを見透かすことである。それは、見かけの\*閉塞した現実を突破して、新しい魅力や美しさを創造するための知恵でもある。

(田中真知『美しいをさがす旅にしよう』より)

注\*\*枯山水…水を使わない日本庭園の様式の一つ。石や砂などによって山や川など



(解答例)

日本人は自然をとらえる時、受動的に理解するのではなく、想像力を働かせる。枯山水や盆栽のように、無限の時間的広がりや宇宙につながる大きなものにとらえ、「見立て」によって新しい自然の美しさを味わってきた。